

段差のない小中連携の在り方

－アセスの分析等を通して－

教職実践専攻・ミドルリーダー養成コース

学籍番号 17GP405 氏名 坂本 寛実

1 はじめに

(1) 国の現状

「小中連携，一貫教育に関する主な意見等の整理」*注¹によると，児童生徒を取り巻く社会の状況が変化する中で，児童生徒に関する課題が多様化，複雑化（ひとり親世帯，共働き世帯の増加による家庭教育力の低下，学校の統廃合による地域コミュニティの衰退による地域社会とのつながりの希薄化，多様な価値観を持った人との交流や体験活動の減少，不登校児童生徒数の増加等）してきていることを受け，それぞれの学校段階間で連携して課題解決に当たることが一層求められている。

こうした状況を受け，「小中連携」については平成24年度に「小中連携，一貫教育に関する主な意見等の整理」で現状や課題等が報告されている。その報告による現状は，何らかの小中連携の取組を行っているという回答した市町村は72.4%，そのうち成果として不登校出現率の減少，全国学力・学習状況調査等での平均正答率の上昇，児童生徒の規範意識の向上等が認められると回答した市町村教育委員会は96%である。課題としては，小中の教職員間での打合せ時間の確保が難しい，小中9年間を見通した単元配列表の作成の困難等が認められるという回答が87%である。文部科学省は，「小中連携」を「小・中学校が互いに情報交換，交流することを通じ，小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指す様々な教育」と捉えている。

一方，「学校教育に関する意識調査」*注²では，中学校に入学すると「学校生活に満足している（91%→78%）」，「授業がわかる（70%→52%）」と回答する生徒の割合が小学校段階から下がっている。また，「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」*注³では，不登校児童生徒が小6で10894人だったのが，中1で27992人と大幅に増加する「中1ギャップの問題」も明らかになっている。その要因として，学習面（授業形態の違い，個々の児童生徒の小6時点での学習上の課題を中学校と十分共有されていない）と生徒指導面（生徒指導上の課題が共有されていない，生徒指導の方法の違い）に関して課題や違いがあるといった背景があり，小中での接続が円滑になっていないという指摘がある。

これらのことから「小中連携」に関して，市町村としては様々な取組を行い，学習面，生徒指導面に成果があったと報告しているものの，子どもの立場で考えると，小中間の学習面，生徒指導面での違いに戸惑いを感じており，両者に温度差がある。

さらに，「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方 について(報告)」*注⁴では，次のような「連携から接続へと発展する過程」が示されている。「連携」と「接続」ということばが使われているが，ステップ3から4に移る段階が「接続」であり，その前のステップ2から3に移る段階が「連携」と捉えられる。つまり，連携の過程を経て接続になる

という考えが示されている。

連携から接続へと発展する過程

- ・ **ステップ0** 連携の予定・計画がまだ無い。
- ・ **ステップ1** 連携・接続に着手したいが、まだ検討中である。
- ・ **ステップ2** 年数回の授業、行事、研究会などがあるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。
- ・ **ステップ3** 授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。
- ・ **ステップ4** 接続を見通して編成・実施された教育課程について、実践結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。

(2) A村の現状

A村は、小学校1校、私が勤務する本校1校と小中連携しやすい環境にあり、A村学校教育の振興を図るために、小・中学校がつながりを深めて連携し、9年間の見通しをもって児童生徒を育成していくことを目的としたA村教育振興会が中心となって、主に以下のような取組が行われている。

【教職員の連携】

- ・ A村教育振興会総会（4月）
- ・ 小中合同研究会（11月）
- ・ 小中情報交換会（学習部会・生徒指導部会…7月・12月）
（特別支援教育部会…1月）
（保健部会・事務部会…不定期）

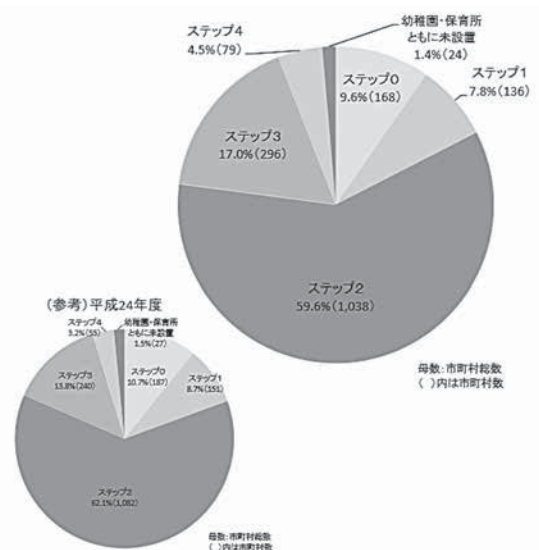
【児童生徒の連携】

- ・ 小中音楽交流会（10月）
- ・ 家庭学習ノートの書き方統一（学習部会によって）
- ・ 給食後の歯磨き（保健部会によって）

ただ、これらの連携は、児童生徒の交流を図ったり、先生方が互いの学校の取組について情報交換することが中心となっている。A村の場合、「連携から接続へと発展する過程」を小中連携における過程にあてはめて捉えると、ステップ2の段階にあたり、「中1ギャップ」を極力感じさせないように小中の段差を緩やかにするという取組は不十分である。

「平成26年度 幼児教育実態調査」*注5で示された市町村ごとの幼小接続の状況*グラフ1によると、連携・接続に向けた取組のステップ2の段階の市町村が59.6%で最も多い。A村もステップ2の段階で、何らかの交流は行っているが、接続を見通したものにはなっていない。

グラフ1 全国の市町村における幼小接続の状況



2 研究の目的と方法

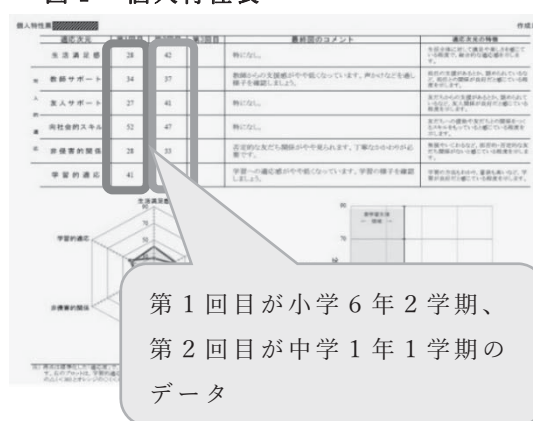
(1) 1年次実践研究

今までA中学校では、1, 2学期に生徒に対して※『アセス』を行い、そのデータで適応感の低かった生徒をリストアップし、夏季、冬季休業中に原因や対応策を考えてきた。

中学1年は前年度の小学6年のデータを引き継いでいないため、移行における変化については分析されていない。そこで、「現在小・中学校それぞれで行われている『アセス』の現小学6年のデータを次年度の中学1年に引き継ぎ、変化を分析することで児童生徒の移行段階でのギャップを明らかにすることができるのではないか」という研究仮説を立て、次のように調査した。

- ①平成29年度の中学1年59人について、小学6年時と中学1年時のアセスデータを集めた。
- ②第1回目に小学6年2学期(12月)時のデータ、第2回目に中学1年1学期(6月)時のデータを入力し、「個人特性表」*^{図1}を作成した。
- ③データ分析ソフト「js-STAR 2012」を用いて、アセスの6つの学校適応感それぞれについて、群と学年を要因とする2(小学6年時の各適応感の上位群, 下位群)×2(小学6年, 中学1年)の分散分析を行った。

図1 個人特性表



※アセスについて

「学校環境適応感尺度『アセス』(ASSESS: Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres)」はアンケートを活用したアセスメントツールであり、次の6つの側面から「学校適応感」を捉えており、適応していると感じるほど得点が高くなる。

- ①**生活満足感**：生活全体に対して満足や楽しさを感じている程度を表すもので、総合的な適応感を示したもの。例) 気持ちが楽である、自分はこのびのび生きていると感じる
- ②**教師サポート**：担任(教師)の支援があるとか、認められているなど、担任(教師)との関係が良好であると感じている程度を示したもの。例) 担任の先生は困ったときに助けてくれる、担任の先生は信頼できる
- ③**友人サポート**：友だちからの支援があるとか、認められているなど、友人関係が良好だと感じている程度を示したもの。例) 悩みを話せる友達がいる、友達はわたしのことをわかってくれる
- ④**向社会的スキル**：友だちへの援助や友だちとの関係をつくるスキルを持っていると感じている程度を示したもの。例) 友達や先生に会ったら、自分からあいさつをしている
- ⑤**非侵害的關係**：無視やいじわるなど、拒否的・否定的な友だち関係がないと感じている程度を示したもの。例) 仲間に入れてもらえる、友達から無視されない
- ⑥**学習的適応**：学習の方法もわかり、意欲も高いなど、学習が良好だと感じている程度を示したもの。例) 授業はよくわかる、勉強のやり方がよくわかる

(2) 2年次実践研究

1年次同様、平成30年度の中学1年55人についてのアセスデータを集めて分散分析を行った。しかし、それだけでは不十分であろうということで移行期におけるギャップを具体的に探るため、平成30年度については、6月に中学1年に対し「小中での違いに関するアンケート」を実施した。さらに、これまでの研究成果をA村全体で共有し、連携をさらに前進させるため、11月の「A村小・中学校合同研究会」で、A村の小・中学校教職員や教育長、教育委員に対して発表し、「小中の円滑な接続のために、小中でそれぞれどんなことができると思いますか。」という事後アンケートを実施した。

3 研究調査

2年分の分散分析の結果*表1・グラフ2によると、“生活満足感”については平成29年度は上位群、下位群で、平成30年度は上位群のみで移行段階の学年による有意差が見られた。

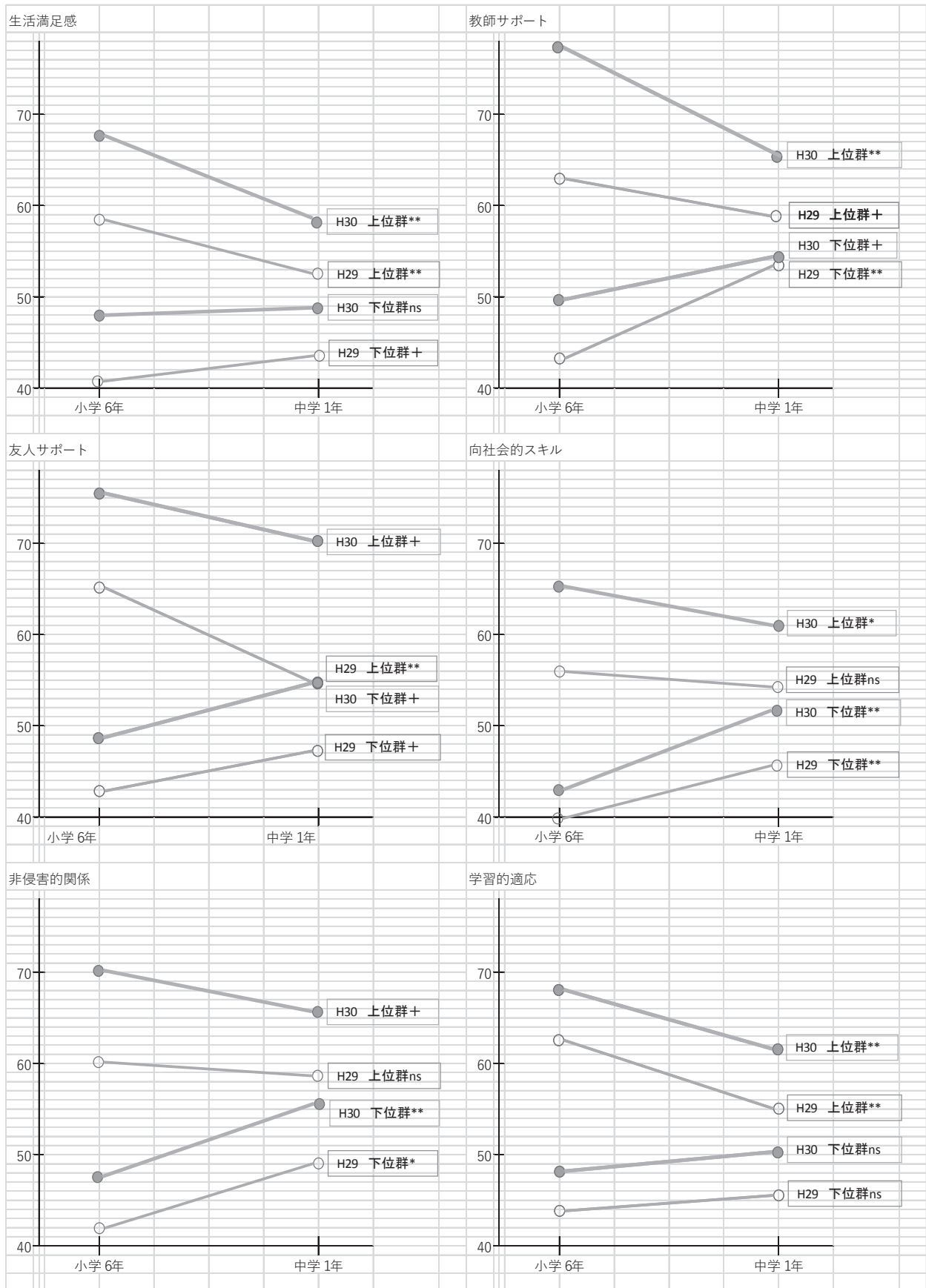
“教師サポート”、“友人サポート”については2年間とも上位群、下位群で学年による有意差が見られた。“向社会的スキル”、“非侵害的關係”については平成29年度は下位群のみ、平成30年度は上位群、下位群で学年による有意差が見られた。“学習的適応”については2年間とも上位群のみ学年による有意差が見られた。

これらのことから、小学校での下位群は中学校に入学すると“学習的適応”以外の適応感が上がり、逆に小学校の上位群は中学校に入学すると全ての適応感が下がる傾向がある。

表1 アセスの学校適応感の学年別及び上下位群別の平均値と分散分析（平成30年8月分析）

平成29年度中学1年 アセスの適応感の平均値及び標準偏差					分散分析				
学年 群	小学6年		中学1年		6年 群差	1年 群差	上位群 学年差	下位群 学年差	交互作用
	上位	下位	上位	下位					
生活満足感	58.5 (9.52)	40.3 (5.93)	52.7 (7.46)	43.7 (8.91)	74.07**	17.32**	11.73**	3.95+	14.65**
教師サポート	63.1 (11.34)	43.3 (7.39)	58.9 (14.32)	52.8 (9.82)	60.50**	3.50+	3.02+	15.38**	16.01**
友人サポート	65.1 (12.95)	42.7 (5.81)	54.4 (11.69)	47.1 (12.53)	69.82**	5.08*	19.65**	3.34+	19.60**
向社会的スキル	55.8 (5.33)	39.7 (6.86)	54.3 (9.94)	46.2 (9.23)	98.08**	10.30**	0.55ns	10.54**	7.94**
非侵害的關係	59.8 (9.65)	41.7 (5.96)	58.2 (13.10)	48.9 (12.48)	72.10**	7.47**	0.35ns	7.10*	5.29*
学習的適応	62.4 (7.33)	43.7 (6.52)	54.9 (9.85)	45.6 (8.76)	101.90**	13.99**	21.52**	1.16ns	16.34**
平成30年度中学1年 アセスの適応感の平均値及び標準偏差					分散分析				
学年 群	小学6年		中学1年		6年 群差	1年 群差	上位群 学年差	下位群 学年差	交互作用
	上位	下位	上位	下位					
生活満足感	67.8 (9.20)	47.9 (7.36)	58.1 (8.92)	48.4 (9.45)	75.54**	14.56**	16.70**	0.06ns	9.40**
教師サポート	77.9 (8.82)	49.5 (8.29)	65.7 (17.52)	54.3 (12.20)	145.88**	7.54**	19.29**	2.89+	18.55**
友人サポート	75.6 (10.70)	48.5 (7.63)	70.0 (14.44)	53.7 (11.19)	112.10**	21.18**	3.44+	2.90+	6.33*
向社会的スキル	65.2 (7.33)	43.0 (6.52)	60.9 (9.85)	50.8 (8.76)	89.58**	15.63**	4.58*	14.83**	17.94**
非侵害的關係	70.1 (12.15)	47.6 (5.56)	65.6 (13.47)	55.6 (13.90)	74.84**	7.04*	3.37+	10.43**	12.83**
学習的適応	67.8 (8.13)	47.9 (7.69)	61.5 (9.61)	50.1 (11.62)	83.39**	14.97**	9.57**	1.24ns	8.84**
(注) ()内は標準偏差, **: p<0.01, *: p<0.05, + : p<0.1									

グラフ 2



また、移行期におけるギャップを具体的に探るため、平成30年度については、6月に中学1年に対して「小中での違いに関するアンケート」を実施した。なお、アンケートの24項目はA村の小中での移行期に戸惑いを感じるであろうと想定されるものである。

分散分析でも用いた小学6年時のアセスで生活満足感の高い上位群、低い下位群に分けて24の項目の平均値*表²を見ると、全体的に数値は高くない(項目20以外は3以下)ので、A村では移行期での戸惑い(ギャップ)は少ないと言える。項目ごとに見ると、「制服になったこと」、「着替えがあること」、「定期テストがあること」のように、小学校ではなかったことについてはやや数値は高くなっている。

さらに、その他に戸惑いを感じたことがないかという自由記述欄を設けたところ、少数意見ではあるが、「髪の手入れがあること」、「清掃時に体力づくり活動があること」、「教室にあまり本がないこと」という答えがあった。

表2 小中での違いに関するアンケート結果(平成30年7月分析)

【1:男・2:女】	しゅっせきばんごう 出席番号【	ばん 番	戸惑い を感じる	やや 戸惑い を感じる	どちらで もない	あまり 戸惑い を感じな い	全く 戸惑い を感じな い	生活満足感		全体
								上位 28人	下位 27人	
1	とほ とうがく じてんしゃ とうがく 徒歩やバス通学から自転車通学になったこと		5	4	3	2	1	1.5	1.8	1.6
2	しふく せいふく 私服から制服になったこと		5	4	3	2	1	3	2.4	2.7
3	ランドセルからスクールザックになったこと		5	4	3	2	1	1.4	1.6	1.5
4	きょうかしょ りょう ふ おも 教科書、ワークなどの量が増え、かばんが重くなったこと		5	4	3	2	1	2.4	2.8	2.6
5	ぶかつどう にもつ おお 部活動の荷物が重いこと		5	4	3	2	1	1.3	1.4	1.4
6	が ふん い き にんげんかんけい か クラス替えによって、クラスの雰囲気、人間関係が変わったこと		5	4	3	2	1	1.9	2.4	2.2
7	あさ かい かえ かい かつ ちが 朝の会、帰りの会のやり方が違うこと		5	4	3	2	1	1.5	1.8	1.6
8	やす じかん ふん ふん 休み時間が5分から10分になったこと		5	4	3	2	1	1.3	1.7	1.5
9	じゅぎょうじかん ふん ふん 授業時間が45分から50分になったこと		5	4	3	2	1	2.3	2	2.2
10	なかやす 中休みがないこと		5	4	3	2	1	2.1	2.1	2.1
11	きょうか せんせい ちが 教科ごとに先生が違うこと		5	4	3	2	1	1.6	1.7	1.7
12	じゅぎょう はや 授業のスピードが速くなったこと		5	4	3	2	1	1.9	2.1	2
13	ばんしょ しかた ちが じ おおき いろづか 板書の仕方が違うこと(字の大きさ・色使いなど)		5	4	3	2	1	1.6	1.4	1.5
14	しゅくたい おお 宿題が多くなったこと		5	4	3	2	1	2.6	2.1	2.4
15	しょうがっこう ぎじゆつ きょうか 小学校にない技術などの教科があること		5	4	3	2	1	1.4	1.5	1.4
16	とちゆう き が 途中で着替えがあること		5	4	3	2	1	2.2	2.8	2.5
17	きゅうしょく じゅんび しかた ちが 給食の準備の仕方が違うこと		5	4	3	2	1	1.6	1.8	1.7
18	きゅうしょく りょう ふ 給食の量が増えたこと		5	4	3	2	1	1.6	2.2	1.9
19	ひるやす いいん かいがっこう さい ぶかつどう あつ 昼休みに委員会活動や再テスト、部活動の集まりがあること		5	4	3	2	1	1.6	1.8	1.7
20	ていき 定期テストがあること		5	4	3	2	1	3.3	2.9	3.1
21	ぶかつどう しゅるい おお 部活動の種類が多いこと		5	4	3	2	1	1.3	1.5	1.4
22	ぶかつどう せんぱいこうはい じょうげかんけい 部活動で先輩後輩の上下関係があること		5	4	3	2	1	1.9	2.1	2
23	しょうがっこう かえ おそ 小学校よりも帰りが遅くなったこと		5	4	3	2	1	1.9	2	2
24	しょうがっこう ぎょうじ 小学校にない行事があること		5	4	3	2	1	1.6	2.4	2

「小中での違いに関するアンケート結果」から、移行による戸惑いを感じている生徒は少ないことがわかった。なぜA中学1年は戸惑いを感じなかったのかを、12月に中学1年56人に対して自由記述式で再度アンケートを実施したところ、以下のような結果*表3になった。

表3 戸惑いを感じなかった理由アンケート結果（平成30年12月）

順	戸惑いを感じなかった理由	人数
1	兄弟から中学校はどんなところか聞いていたから	22
2	そんなに気にしていなかったから	9
3	そもそも小中にそんなに違いを感じなかったから	8
	親から中学校はどんなところか聞いていたから	
5	違いがあるのは当たり前だと思っていたから	7
	小学生の頃から中学校の部活動に参加し、先輩から話を聞いていたから	
7	小学校の先生から中学校はどんなところか聞いていたから	5
8	地域の大人、先輩から中学校はどんなところか聞いていたから	3
9	小学6年の時に、中学校の説明会で様子を見たりしていたから	2

さらに、11月の「A村小・中学校合同研究会」において、A村の小・中学校教職員や教育長、教育委員に対して、これまでの研究成果についての発表を行った。発表後、話し合いの時間はとれなかったため、「小中の円滑な接続のために、小中でそれぞれどんなことができると思いますか。」という事後アンケートを実施し、以下のような回答があった。

【小学校教員】

- ・中学校に進学する前に、6年生に対して中学校の先生が授業してくださるような体験ができればスムーズに進学できるかもしれないと思った。（複数）
- ・それぞれというより一緒のベクトルを向けるように統一した取組、情報交換が必要。
- ・お互いの指導方法を理解し、授業を見るだけでなく疑問をぶつけ合う場が必要。
- ・授業公開がよいと思う。
- ・教科の学習の接続についての共通理解をさらに進めていかなければならないと思った。
- ・情報交換を定期的に行い、お互いの教育活動を共有していく。
- ・低→中→高学年と発達段階に合わせ、教科担、専科を増やす。（複数）
- ・小学校生活から中学校生活に戸惑わずスムーズにいけるように中学校で取り組んでいることをできるだけ小学校でもやっていくことが大事だと思った。

【中学校教員】

- ・小中に関する情報共有。
- ・中学校の先生が小学校で授業をする。小学校の卒業生に中学入学に向けてつなぎ課題を出す。
- ・共通して取り組むことを継続して行う。

- ・まだまだ中1ギャップが大きいと思うので、中学校では小6の様子を見に行くとか、小学校では「中学校ではこうするんですよ」という心構えを指導してもらおう。
- ・合同研や各部会では、情報交換だけでなく日々の取組や課題についてディスカッションすべき。教員がまず対話的、協働的な話し合いをすべき。村のSCをどのように活用していくのか、小中間で一貫した方向性を見つければもっと連携しやすくなると思う。
- ・小中の教育課程についての話し合い。
- ・体力づくりについての連携。(スポーツテストの結果や体力づくりの内容など。)
- ・現在行っている新入生の情報交換は継続すべきだと思う。(小さな情報もできればほしいので、長くなってもいいようにその時間は確保してほしい。)
- ・小学校でやっているのなら中学校でも『SEL』をやってみる。

4 考察

(1) 小学6年と中学1年のアセスの6つの適応感の数値の変化から

小学校での下位群は中学校に入学すると“学習サポート”以外の適応感が上がり、逆に小学校の上位群は中学校に入学すると全ての適応感が下がる傾向があることが明らかになった。その原因の1つとして、下位群の生徒には中学校入学後手厚く対応しているが、上位群には下位群に比べて手をかけていないことが考えられる。

毎年2月末に「新1年生情報交換会」を行い、特に「生徒指導面」と「学習面」で手がかかりそうな子について小学校教員から詳しく話を聞き、中学校入学後普段から様子を観察し、手をかけて指導している。それが、下位群の「教師サポート」、「向社会的スキル」、「非侵害的関係」の適応感の平均値の上昇につながっていると考えられる。「友人サポート」についても学級編成の際に配慮されている。ただ、「学習サポート」については、小学校の内容が苦手なままであれば中学校内容にもついていけず低いままになっているため、もっと個への対応を行っていく必要がある。

一方、上位群の生徒には、自分である程度できるだろうとあまり手をかけていない。しかし、上位群の生徒の中で特に適応感が大きく下がった生徒にインタビューしたところ、「親から中学校に進学したんだからもっとちゃんとしなさいと言われるようになった。周りがどんどん中学生らしく成長しているのに、自分だけおいていかれているような気がした。」と答えている。小学6年時でのアセスの適応感が高かった生徒の中には、親からのプレッシャーを感じたり、スムーズに中学校に適應できる生徒に対して劣等感を感じているということを踏まえて、中学校側では不安や戸惑いを早期に取り除けるようなサポートを行っていかねばならない。今まで以上に中学1年5月の教育相談で個々の成長を認めることで、上位群の適応感の下がりを抑えられるはずである。

また、グラフ2から平成29年度入学生よりも平成30年度入学生のほうが全体的に高い傾向があることが明らかになった。これは、小学校で平成29年度(平成30年度入学生が6年時)から、中学校の「A中いいね」(中学校の生徒が互いに良い部分を認め合う取組)を参考にした^{*1}「対人関係能力育成プログラム『SEL』(Social and Emotional Learning)」を行っている成果ではないかと考えられる。

それに加えて、小学校は平成30年度から子どもたちに望ましい価値観と行動について理解させ、身につけさせることで、子どもたちの対人関係力を育てる^{*2}『PBIS (Positive

Behavioral Interventions and Supports) (積極的な行動介入と支援)』プログラムと中学校で行われている「清掃時体力作り」も新たに実施しており、次年度はさらに平均値が高くなると予想される。

※1 『SEL』は、自分や相手の気持ちを考えながら、好ましい方法で課題を解決するスキルを身に付けるために、①Self Awareness (自己理解)、②Self Management (セルフマネジメント)、③Social Awareness (社会や他者の理解)、④Relationship Skill (対人関係スキル)、⑤Responsible Decision Making (責任ある意思決定) の5つの能力を学校の中で育んでいくものである。

※2 『PBIS』は、学校内のそれぞれの場所に応じた望ましい行動を知らせ、子どもたちが行った「善い行い・望ましい行動」(教室で進んでゴミを拾うなど。)に対して、先生方が「Good Behavior チケット」を発行することで、その行動を賞賛し、子どもたちの良い行動を増やしていこうというもので、アメリカの学校教育の場に広がりを見せている。

(2) 小中での違いに関するアンケート結果から

A村では移行による戸惑いを感じている生徒は少ない。なぜA中学校の1年生は戸惑いを感じなかったのかを整理すると、大きく2つの理由になる。

1つ目は、兄弟、親、小学校の先生、地域の大人、先輩から中学校がどんなところかを事前に聞いていたために、中学校入学前に心の準備ができていたということである。A村は家庭でのコミュニケーションがしっかりとられており、地域でも子どもを支えている環境にあることが影響している。

2つ目は、そもそも小中で違いがあるのは当たり前だと思って入学しているために、そんなに戸惑いを感じなかったということである。実際に、10月の小中音楽交流会のあと、毎年小学校の教員から「中学生の立派な姿を見て、小学生のよい刺激になる」という話を聞くが、立派な中学生の態度を見ることで、中学生としての姿をイメージして入学できていると考えられる。

(3) 小中の教職員へのアンケート結果から

これまでもA村教育振興会が中心となって、小中で情報交換や授業公開が定期的に行われてきたが、「小中の円滑な接続」という視点はなかった。しかし、11月の発表の事後アンケートから「情報交換だけでなく日々の取組や課題についてディスカッションすべき。」や「それぞれというより一緒のベクトルを向けるように統一した取組、情報交換が必要。」といったような今までの取組から円滑な接続のためにさらに一步踏み込んだ取組が必要だという前向きな意見が出された。

また、中学校の「A中いいね」を参考に、小学校で『SEL』、『PBIS』を行うようになったり、中学校の「清掃時体力作り」を小学校でも行うようになったりするなど、小学校側が中学校で成果を上げている取組を積極的に取り入れたことにより、小中の段差はかなり低くなってきている。それに加え、乗入授業や小学校での段階を踏んだ教科担任制、中学校でも小学校で取り組んでいる『SEL』をやってみたらどうかという教育課程に踏み込んだ意

見も出てきたというのは、連携から接続の段階に進んだと言ってもよいと考えられる。

5 成果と課題

この研究の成果として2点挙げられる。

1点目は、小学校からアセスのデータを引き継いだことで移行期のアセスの変化が見れるようになったことである。それによって今まで見落とされてきたことが見えるようになった。例えば、中学1年1学期のアセスで生活満足感が50の生徒がいれば今までは取り上げて対応策を考えることはなかったが、小学6年2学期のアセスで80あったとすれば、移行期でかなり下がったことになり、何らかの対応策が必要になってくる。今まで適応できていると思っていた生徒も実は移行期でギャップを抱えていたということがわかるようになったことは対応していくうえで大きな資料となる。

2点目は、アセスとアンケートを併用することでよりギャップが具体的に見えやすくなるということである。アセスは学習面と友人・教師との人間関係という大枠的な適応感については見えるものの、具体的になぜ適応感が低いかは日頃の観察や本人と対話しなければ見えづらい。それを、アンケートは具体的なSOSは何なのかを数値の低いところを見ればわかるようになるだけでなく、アセスからだけでは気づかないSOSにも気づくことができるようになる。

しかし、教員のアンケートから「段差のない小中連携の研究はなるほどと思う面もあったが、アセスだけでははかれるものかどうかはよくわからないと思った。」という意見もあり、まだまだ不十分なところもある。今回想定される戸惑いを24項目挙げ、アンケートをとったが、インタビューしてみると24項目以外にも戸惑いがあることがわかった。今後の課題として、アセスを補完するアンケートの項目をもっと吟味していかなければならない。

また、今回、小中学校の先生方から円滑な接続のために何が必要かを具体的に聞いた。その中からできるものを少しずつ実行に移し、その成果を検証していく必要がある。A村の場合はまず学習面で情報交換だけでなく、同じベクトルの取組を行うようにしていくことが必要である。

最後に、本研究を進めるにあたり、アセスの使用の許可とご助言をいただいたA小学校の校長先生と研究に協力してくださったA中学校の校長先生をはじめ先生方には心から御礼申し上げます。

引用・参考文献

- *注1 中央教育審議会初等中等教育分科会 学校段階間の連携・接続等に関する作業部会 (2012) 「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」
- *注2 文部科学省 (2003) 「学校教育に関する意識調査」
- *注3 文部科学省 (2018) 「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」
- *注4 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 (2010) 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方 について (報告)」
- *注5 文部科学省初等中等教育局幼児教育課 (2015) 「平成26年度 幼児教育実態調査」